

その他

動物病院での飼い主への説明文書作りにおける 18 年間の変遷 Development of Explanatory Documents for Pet Owners at a Veterinary Clinic over 18 Years

宮崎良雄

Yoshio Miyazaki

宮崎動物病院

Miyazaki Animal Hospital

Abstract

The author has run a veterinary clinic for dogs and cats since July 2003. To make his medical explanations easier to understand for pet owners, he provides explanatory documents for their pets' daily medical care. Since June 2011, he has published journal articles on how to use the best methods to make these explanatory documents more readable; however, these methods have changed over time during daily practice and dissertation writing. This paper summarizes the changes in his approaches, ideas, and devices mentioned in these documents over the last 18 years, such as: (1) the reading difficulty dropped from junior high school level to elementary school level; (2) conciseness was emphasized over providing too much information; (3) and ensuring that the explanatory documents captured the pet owners' attention was as important as making them easily readable. These changes emerged while preparing the documents and observing the pet owners' reactions in addition to the related research and dissertation writing. Improving explanatory documents for pet owners requires repetition in both daily practice and research considerations.

要旨

筆者は、2003年7月から犬・猫を対象とした動物病院を運営している。開業当初から、日々の診療では「説明文書」を作って、それを飼い主に渡してきた。診療の説明を分かりやすくするためである。さらに、2011年6月からは「そのような文書を読みやすくするための工夫」について複数の雑誌で論じてきた。説明文書は最善と思った方法で作し、論文は最善と思った方法を述べたものである。しかし、それらの方法は、日々の実践や論文の執筆活動を通して変化していった。本稿では、この18年間の振り返り、飼い主への説明文書に対する筆者の「取り組み方」と「考え方」、「工夫」の変遷を整理した。例えば、次のような大きな変化があった。(1)難易度を中学生レベルから小学生レベルに引き下げた。(2)文書の詳しさより簡潔さを重視するようになった。(3)読みやすい文書を作るだけでなく読んでもらうための工夫にも気を配るようになった。これらの変化は、文書を作って渡し飼い主の反応をみるといった実践だけから生じたものではない。関連の研究や論文の執筆活動も大きなきっかけとなった。飼い主への説明文書を改良するためには、日々の実践と机上の考察の両方の反復が必要である。

キーワード：小動物獣医療、説明文書、可読性、ヘルスリテラシー、ヘルスコミュニケーション

Keywords: small animal veterinary medicine, explanatory documents, readability, health literacy, health communication

1.序文

筆者は、2003年7月から、犬・猫を対象とした小さな動物病院を運営している。開業当初から、日々の診療では説明の内容を「文書」にまとめ、それを飼い主に渡す取り組みを続けてきた。例えば、この10年間では、1年間に平均436通の文書を作った。

口頭で説明するだけでなく、説明内容を文字資料としても提供したほうが、診療の説明が分かりやすくなるかと考えているからである。文書を残せば、説明内容を忘れてしまったときに振り返ることもできる。それぞれの飼い主に合わせた説明にするために、中身の文章はそのつど

考えている。

さらに2011年6月からは、「そのような文書を読みやすくするための工夫」について、複数の雑誌で論じてきた[1-33]。これまでに発表してきた論文は、2021年11月現在、印刷準備中の2報を含め、44報に及ぶ。

例えば、2020年10月発行の日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌では、次の7つの工夫を提案した[30]。

- ① 文字を適度に大きくする。
- ② 難しい漢字を使わない。
- ③ 内容を手短かにまとめる。
- ④ 小学生向け国語辞典レベルの説明を目指す。

- ⑤ キーワードを示す。
 - ⑥ 文書の主旨・内容を口頭できちんと説明する。
 - ⑦ 項目ごとに見出しをつける。
- さらに、具体例として次の例文を示した。

診断

- 背骨の変形（変形性せきつい症）
- 背骨の一部の骨折

治療内容

- 痛み止め（飲み薬：商品名）
- 安静

コメント

- レントゲン写真をみると、背骨が変形し、下側にせり出しています。
- その一部が折れています。
- 背骨の変形は、治りません。
- 骨折は、自然に治ります。
- 骨折が治るまでは、安静にさせ、痛み止め（商品名）で治療します。

次回

- 1週間後に診察したいと思います。
- ただし、調子が悪い場合は、お早めにご連絡ください。

（定型文）ご不明な点がございましたら、当院までお問い合わせください。おだいじにどうぞ。

飼い主への説明文書は、その時点において最善と思った方法で作ったものである。いっぽう、一連の論文は、その時点において最善と思った方法を述べたものである。しかし、それらの方法は、文書を作って渡し飼い主の反応をみるといった日々の実践や、論文の執筆活動を通して変化していった。

本稿では、筆者のこの18年間を振り返る。そのうえで、説明文書に対する筆者の「取り組み方」と「考え方」、「工夫」の変遷について整理した。

2. 取り組み方の変遷

取り組み方の変遷を表1.にまとめた。この18年間を5つの時期に大別すると、次のようになる。

(1)2003年7月～2008年3月

「飼い主への説明文書を作り始め、それを定着させた時期」である。2003年7月の開業と同時に、飼い主へのサービスの一環としてこの取り組みを始めた。当初は、口頭説明を文字で再現すること（文字起こし）を目指していた。診断や治療の根拠を内容に含め、「詳しい文書」を作ること心掛けていた。1日の診療が終わってから時間をかけて作っていたため、診察中にその場で渡すことができなかった。

(2)2008年4月～2010年1月

「診察中にその場でも説明文書を作り始め、それを定着させた時期」である。2008年4月に適当なミニパソコン（小型のノートパソコン）が発売されたため、診察室用に購入した。それとプリンタを使って、診察中にその場でも文書を作るようになった。

その場で作るためには、中身の文章を短時間でまとめる必要がある。その実践を続けていくうちに、必然的に「簡潔な文書」を作るように変化していった。その後、詳しい文書より簡潔な文書のほうが、飼い主には理解してもらいやすいことに気づいた。

(3)2010年2月～2013年11月

「論文の執筆活動を始め、それを定着させた時期」である。2010年2月頃からは、説明文書を作るだけでなく、文書の読みやすさについて意識して考えるようになった。準備期間を経て、2011年6月からは、このテーマについての論文を発表するようになった。

(4)2013年12月～2019年12月

「説明文書を読んでもらうことにも力を入れ始め、それを定着させた時期」である。きっかけとなったのは、2013年12月に発表した論文のために行った「説明文書に対する飼い主の反応」についての調査であった[14]。渡された文書をその場ですぐに読む飼い主は、当時、全体の約半数にすぎないことが判明した。この結果をふまえ、読みやすい文書を作るだけでなく、読んでもらうための工夫にも意識して取り組むようになった。

(5)2020年1月～現在

「飼い主への説明文書を電子ファイルとしても保存し始め、それを定着させた時期」である。それ以前は、紙の文書だけを保存し、一部の例外を除き、7年が経過したらカルテと一緒に廃棄していた。2020年1月中旬からは、すべての文書をリッチテキスト形式の電子ファイルとして保存している。それに伴い、計量言語学的手法による、文書の後ろ向きの調査が容易になった[31-33]。

3. 考え方の変遷

ここでは論文を投稿し始めた2011年以降を対象とする。文書の読みやすさについての考え方の変遷を表2.にまとめた。まとめるにあたり、テーマを次の3つにしぼった。なお、文中に記載した時期は、該当する論文が掲載された年月にそろえた。

(1)内容の難易度

論文を投稿し始めた当初は、義務教育の学習内容を考慮し、現役の「中学生」が読んで理解できるレベルの説明を目指していた[2]。しかし、日々の実践から、多くの飼い主にとって、それでは難しすぎると考えるようになった。

2013年4月からは、「小学生向け国語辞典」の説明文レベルの説明が適当であると考えようになった[9]。当初は、経験からくる単なる思いつきであった。しかし、2017年8月に発表した論文における「3種類の辞書の収録語数」の調査結果は、数字にもとづく有力な根拠となった[24]。

そのいっぽうで、小学生向け国語辞典レベルの説明には、次のような問題があるとも考えていた。

- 日々の生活で使わない知識は小学生レベルであったとしても身につけにくい[15]。
- 専門的な内容の説明は小学生レベルの文章であったとしても易しくない[15]。
- 小学生レベルの説明では、回りくどくて、かえって

分かりづらくなることがある。

- 学校の学習内容はその人が学んだ時代によって多少異なる[7]。

それらをふまえ、2016年5月からは、小学生レベルの説明を目指すためには、内容や言葉の「取捨選択」が大切であると考え始めた[21]。その後、取捨選択の目安を考えていくうちに、2017年2月には「端的な言葉」を重視するようになった[22]。しくみを理解してもらうより、まずは、説明の目印となる「キーワード」を覚えてもらう。そのほうが、結果として診療が円滑に進むことが多いことに気づいた。

専門用語であっても、使う数をしぼり、詳しい内容に触れなければ、単なる「ものの名前」として、小学生レベルの説明に組み込むことができる。極端に長いなどの理由で覚えにくい言葉でない限り、具体的な名前があったほうが説明が簡潔になる。

例えば、「PCR検査」という言葉は、新型コロナウイルス感染症の流行以来、多くの人が知る言葉となった。しかし、PCR検査のしくみが広く知れわたったわけではない。あくまでも「コロナの詳しい検査」を指す言葉として広まっただけである。しかし、それで不便はないし、端的なキーワードとしてむしろ役に立っている。

(2)漢字の難易度

論文を投稿し始めた当初は、中学校の学習レベルの漢字を目安としていた[4]。

しかし、それでは難しすぎると考えるようになり、2016年5月からは次のような目安に変更した[21]。

- 「小学校」で学習する漢字は使う。
- それ以外の常用漢字は注意して使う。
- 常用漢字以外の漢字はなるべく使わない。

日本語の文章では、漢字の使われ方が、分かりやすさに大きく影響する。しかし、急いで文書を作るときに、漢字の難易度をいちいち調べる時間的な余裕はない。そのため、それらの情報を獣医療の雑誌で紹介し、他の獣医師と共有することが大切であると考えようになった。2021年5月に発表した論文は、その実践例である[31]。

(3)文章の長さ

論文を投稿し始めた当初から現在に至るまで、「200字以内」の文章を書くことを理想としている[1]。ちょうど、文庫本カバーの裏に書かれている、その本の紹介文と同程度の字数である。しかし、筆者としては、実際には300～500字程度の文章のほうが書きやすい[29]。

その後、レイアウトを工夫すれば、多少字数が増えても読みやすさが保てると考えるようになった。2012年7月から少しずつ考え始め、2018年7月に発表した論文ではそれまでの考えをまとめた[5,26]。例えば、単なる文章を示すのではなく、項目ごとに見出しをつけ、箇条書きで示すとよい。現在は、200字以内を理想としつつも、見目が簡潔でさえあれば、具体的な字数にはこだわっていない。

ただし、過去に時間をかけて200字以内で説明を書く取り組みを積んだ経験は、有意義であったと考えている。

とくに文章を短く「修正」する作業は、要点をおさえる練習になった。さらに、字数の感覚が養われた[29]。

4.工夫の変遷

これまでに積み重ねてきた工夫を表3にまとめた。表現・日本語に関する工夫と「専門的な内容に関する工夫」は、説明の難易度を小学生レベルに引き下げたことと関係する[3,4,6,9,10,12,16,17,20-22,25]。「手短かにまとめるための工夫」は、文書の詳しさをより簡潔さを重視するようになったことと関係する[5,8,10,18,29]。「見やすくするため・読んでもらうための工夫」は、まずは文書を読んでもらうことが大切であると考えようになったことと関係する[13,21,23,26]。

表3を見ると、どの工夫も同じくらいの程度で重視していることがうかがえる。なお、これらの工夫は、現在もおおむね実行中である。

5.結語

本稿では、飼い主への説明文書に対する、この18年間の筆者の「取り組み方」と「考え方」、「工夫」の変遷を整理した。様々な変化は、診療の現場で実際に文書を作って渡し飼い主の反応をみるといった実践だけから生じたものではない。診療以外の時間に、関連の研究や論文の執筆を行い、机上で改めて考察したことも変化の大きなきっかけとなった。ただし、机上で考えた工夫は、実際に試してみないと本当に有効であるのかどうかは分からない。このように説明文書を改良するためには、日々の実践と机上の考察の両方の反復が必要である。本稿において、18年間の変遷を「取り組み方」と「考え方」、「工夫」の3つに大別して整理したのは、そのためであった。

なお、筆者が作る飼い主への説明文書における大きな変化は、次の3つに集約される。

- ① 説明の難易度の目安を中学生レベルから小学生レベルに引き下げた。
- ② 文書の詳しさをより簡潔さを重視するようになった。
- ③ 読みやすい文書を作るだけでなく読んでもらうための工夫にも気を配るようになった。

これらの変化は、文書による説明が、程度の差はあるにせよ飼い主に対して常に「読みの負担」を強いることに気づいた結果である。

ところで筆者は、2020年10月に日本ヘルスコミュニケーション学会に入会した。それまでは、多くの先生方のお世話になりながらも、基本的には独自の取り組みを続けてきた。獣医療領域においては、残念ながら、今のところヘルスコミュニケーションやヘルスリテラシーについての議論がほとんどないからである。一連の取り組みを始めてから18年が経過した。18年間はある程度まとまった期間であると判断し、今回、実践報告を行うに至った。一人の臨床獣医師の変化の記録が、参考資料の一つとなれば幸いである。

本稿の内容や筆者の取り組みに対するご質問やご意見、ご感想をお待ちしている。

利益相反自己申告

なし

引用文献

- [1] 宮崎良雄 (2011) : 飼い主向け文書の可読性 (読みやすさ) を考える, 獣医畜産新報 64 (6), 495-496.
- [2] 宮崎良雄 (2012) : 獣医療文書の日本語 (文章) としての難易度を判定する, 獣医畜産新報 65 (4), 305-307.
- [3] 宮崎良雄 (2012) : 獣医療文書の「わかりやすさ」に関する話題, 獣医畜産新報 65 (5), 389-391.
- [4] 宮崎良雄 (2012) : 獣医療文書の漢字と表現, 獣医畜産新報 65 (6), 501-502.
- [5] 宮崎良雄 (2012) : 獣医療文書の文と文章の長さ, 獣医畜産新報 65 (7), 571-572.
- [6] 宮崎良雄 (2012) : 獣医師の説明における比喻表現, 獣医畜産新報 65 (10), 849-850.
- [7] 宮崎良雄 (2012) : 獣医師の説明と飼い主の獣医療知識, 獣医畜産新報 65 (11), 933-935.
- [8] 宮崎良雄 (2012) : 飼い主に渡す短い説明文書の内容を考える, 獣医畜産新報 65 (12), 1009-1010.
- [9] 宮崎良雄 (2013) : 説明に使う獣医療用語の使い方, 獣医畜産新報 66 (4), 276-278.
- [10] 宮崎良雄 (2013) : 説明文書をわかりやすくするための工夫, 獣医畜産新報 66 (5), 366-368.
- [11] 宮崎良雄 (2013) : 飼い主への説明文書: 要約集, 獣医畜産新報 66 (6), 427-429.
- [12] 宮崎良雄 (2013) : 獣医療と確率, 獣医畜産新報 66 (7), 523-524.
- [13] 宮崎良雄 (2013) : 獣医療文書の文字の大きさ, 獣医畜産新報 66 (10), 769-770.
- [14] 宮崎良雄 (2013) : 説明文書に対する飼い主の反応, 獣医畜産新報 66 (12), 924-926.
- [15] 宮崎良雄 (2014) : 飼い主への説明のむずかしさ, 獣医畜産新報 67 (2), 128-129.
- [16] 宮崎良雄 (2014) : 獣医療における飼い主への説明と外来語の使用, 獣医畜産新報 67 (5), 371-373.
- [17] 宮崎良雄 (2014) : 飼い主への説明文書と日本語の文法, 獣医畜産新報 67 (8), 618-619.
- [18] 宮崎良雄 (2014) : 飼い主への説明文書の構成を見直す, 獣医畜産新報 67 (9), 687-688.
- [19] 宮崎良雄 (2014) : 飼い主への説明文書: 要約集 2, 獣医畜産新報 67 (10), 761-764.
- [20] 宮崎良雄 (2015) : 診断名をつけた背景, 獣医畜産新報 68 (5), 363-366.
- [21] 宮崎良雄 (2016) : 説明文書を読みやすくするための工夫: 動物病院から, 日本語学 35 (5), 83-91.
- [22] 宮崎良雄 (2017) : 飼い主への説明文書におけるわかりやすさとは: 2つの問題点とキーワードの重要性, 獣医畜産新報 70 (2), 125-126.
- [23] 宮崎良雄 (2017) : 飼い主への説明をわかりやすくするために: 資料を使って説明するときの注意点, 獣医畜産新報 70 (5), 384-385.
- [24] 宮崎良雄 (2017) : 飼い主が知っている獣医療用語のめやす, 獣医畜産新報 70 (8), 591-592.
- [25] 宮崎良雄 (2017) : 飼い主に専門的な内容を説明したいときの注意点, 獣医畜産新報 70 (12), 938-939.
- [26] 宮崎良雄 (2018) : 飼い主への説明文書を改良する, 獣医畜産新報 71 (7), 515-516.
- [27] 宮崎良雄 (2018) : 飼い主への説明をわかりやすくするための工夫, 獣医畜産新報 71 (11), 820-826.
- [28] 宮崎良雄 (2019) : 飼い主への説明のわかりやすさを8年間追求して得たもの, MVM 184, 97-104.
- [29] 宮崎良雄 (2020) : 飼い主への説明文書を手短にまとめるための工夫: 筆者の実践例, MVM 191, 101-108.
- [30] 宮崎良雄 (2020) : 飼い主への説明文書を読みやすくするための工夫: ある動物病院の取り組み, 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌 11 (2), 61-69.
- [31] 宮崎良雄 (2021) : 飼い主への説明文書を分析する, MVM 197, 103-107.
- [32] 宮崎良雄 (2021) : 飼い主向けの説明文書から難しい言葉をさがす, MVM 199, 102-107.
- [33] 宮崎良雄 (2022) : 筆者が飼い主への説明で強調してきたこと: 飼い主への説明文書に引いた下線を分析する, MVM 202, (印刷準備中).

文献 11、19、21、27、28、30 は、その当時における筆者の取り組み方や考え方、工夫のダイジェストである。

***責任著者 Corresponding author : 宮崎良雄**
e-mail: ymiyazaki@amail.plala.or.jp

表1. 取り組み方の変遷

| 時期 | 取り組み | | | | | | | | |
|-------------------------------|--|--------------------------|-----|---------------|----|---------------|----|-------------------------------|----|
| 2003年07月 | <ul style="list-style-type: none"> ● 開業 ● 飼い主への説明文書を作り始めた。 <p>説明文書を作る目的：文字による口頭説明の再現 説明文書の平均字数：412.8字（2005年12月～2007年4月）</p> | | | | | | | | |
| 2008年04月 | <ul style="list-style-type: none"> ● 診察室にパソコンとプリンタを設置した。 ● 診察中にその場でも説明文書を作り始めた。 | | | | | | | | |
| 2010年02月 | <ul style="list-style-type: none"> ● 説明文書の読みやすさについて意識して考えるようになった。 | | | | | | | | |
| 2011年01月 | <ul style="list-style-type: none"> ● このテーマについての論文を投稿し始めた。 | | | | | | | | |
| 2011年06月 | <ul style="list-style-type: none"> ● 最初の論文が獣医畜産新報に掲載された。 <p>2011年6月以降に執筆した論文</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>獣医畜産新報（2011年6月～2018年12月）</td> <td>36報</td> </tr> <tr> <td>日本語学（2016年5月）</td> <td>1報</td> </tr> <tr> <td>MVM（2019年7月～）</td> <td>6報</td> </tr> <tr> <td>日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌（2020年10月～）</td> <td>1報</td> </tr> </tbody> </table> <p>*2021年11月調べ（印刷準備中の2報を含む）</p> | 獣医畜産新報（2011年6月～2018年12月） | 36報 | 日本語学（2016年5月） | 1報 | MVM（2019年7月～） | 6報 | 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌（2020年10月～） | 1報 |
| 獣医畜産新報（2011年6月～2018年12月） | 36報 | | | | | | | | |
| 日本語学（2016年5月） | 1報 | | | | | | | | |
| MVM（2019年7月～） | 6報 | | | | | | | | |
| 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌（2020年10月～） | 1報 | | | | | | | | |
| 2013年12月 | <ul style="list-style-type: none"> ● 説明文書を読んでもらうことにも力を入れ始めた。 | | | | | | | | |
| 2020年01月 | <ul style="list-style-type: none"> ● 説明文書を電子ファイルとしても保存し始めた。 | | | | | | | | |
| 2021年05月 | <ul style="list-style-type: none"> ● 電子ファイルのデータを使った論文を発表し始めた。 | | | | | | | | |
| 2021年11月 | <ul style="list-style-type: none"> ● 現在 ● 飼い主への説明文書を作り続けている。 <p>説明文書を作る目的：要点の提示 説明文書の平均字数：328.1字（2020年2月～2021年10月）</p> | | | | | | | | |

表2. 考え方の変遷

| 時期 | 内容の難易度 | 漢字の難易度 | 文章の長さ | 文献 |
|----------|--|--|--|----|
| 2011年06月 | | | ● 200字以内の文章を書く。 | 1 |
| 2012年04月 | ● 中学生が読んで理解できるレベルを目指す。 | | | 2 |
| 2012年06月 | | ● 中学校の学習レベルまでの漢字（漢検3～4級以下）を使う。 | | 4 |
| 2012年07月 | | | ● 200字以内に収まらなければ、段落に分けるか、箇条書きにする。 | 5 |
| 2012年11月 | ● 義務教育の学習範囲を逸脱しすぎない。 ● ただし、義務教育の学習内容は、時代によって異なる。 | | | 7 |
| 2013年04月 | ● 日常用語の目安として小学生向け国語辞典を利用する。 | | | 9 |
| 2014年02月 | ● 日々の生活で使わない知識は、小学生レベルであったとしても身につけにくい。 ● 専門的な内容の説明は小学生レベルの文章であったとしても易しくない。 ● 獣医療の説明は、小学校の学習範囲では、説明しきれない。 | | | 15 |
| 2016年05月 | ● 小学生レベルの説明を目指すためには、内容や言葉の取捨選択が大切である。 ● なじみがうすい言葉でも状況によっては使う。 | ● 小学校で学習する漢字はそのまま使う。 ● それ以外の常用漢字は注意して使う。 ● 常用漢字以外の漢字はなるべく使わない。 | | 21 |
| 2017年02月 | ● 枝葉の内容だけを理解しただけで全体を理解したつもりになる飼い主がいる。 ● 大切な情報は、端的な言葉（キーワード）で示す。 | | | 22 |
| 2018年07月 | | | ● 200字以内が理想である。 ● しかし、レイアウトを工夫すれば、多少字数が増えても読みやすさが保てる。 | 26 |

※時期は、該当する論文を発表した年月にそろえた。

表3. 工夫の変遷

| 時期 | 区分 | 工夫 | 文献 |
|----------|----|--|----|
| 2012年05月 | 表 | ● ビジネス文書と異なり断定調にこだわらない。 | 3 |
| 2012年06月 | 表 | ● なるべく和語を使う。 ● オノマトペを効果的に使う。 | 4 |
| 2012年07月 | 手 | ● 1文の目安を60字以内とする。 ● 結論を優先的に書く。 | 5 |
| 2012年10月 | 表 | ● 基本的に比喩表現を使わない。 | 6 |
| 2012年12月 | 手 | ● 内容の基本パターンを決めておく。 → ①診断、②治療内容、③今後の予定 ● 次の2点は、字数を割いても書く。 → ④質問に対する回答、⑤診療の前提条件 ● 理屈でなく、全体の流れを重視する。 ● 細かな内容を割愛するための前置きを予め考えておく。 | 8 |
| 2013年04月 | 表 | ● 支障がなければ、正確さより分かりやすさを優先する。 ● 差別用語は決して使わない。 | 9 |
| 2013年05月 | 手 | ● 「～は」の説明が終わるところで文を区切る。 | 10 |
| 2013年05月 | 表 | ● 文法的に複数の解釈が1つに決まる文を書く。 ● 敬語は「です・ます」程度の丁寧語を目安とする。 | |
| 2013年07月 | 表 | ● 感覚的で目分量的な確率は安易に使わない。 | 12 |
| 2013年10月 | 見 | ● 文字の大きさは、なるべく14pt以上にする。 → 文字をMS明朝から游明朝に変更してからは12pt以上 ● 行間は1/2～1マス（二分～全角アキ）の広さにする。 | 13 |
| 2014年05月 | 表 | ● 外来語は基本的に自由に使う。 ● ただし、和語に意識する自信がないものは使わない。 | 16 |
| 2014年08月 | 表 | ● 日本語として文法的に係り受けが正しい文を書く。 | 17 |
| 2014年09月 | 手 | ● 話の階層を掘り下げすぎない。 | 18 |
| 2015年05月 | 専 | ● なるべく診断名を明記する。 ● 疾患名が分からない場合は、症状名を診断名とする。 ● その段階で判断できたところまでを診断名とする。 ● 診断名は、適度に数をしぼる。 | 20 |
| 2016年05月 | 見 | ● 文書を渡す主旨を口頭で説明する。 | 21 |
| 2016年05月 | 専 | ● 難しい言葉の取捨選択は、次のようにする。 ①使わなくてすむなら使わない。 ②意味が通じる別の言葉があれば、それに書き換える。 ③意味を深追いせず、具体的な言葉として使う。 | |
| 2017年02月 | 表 | ● 説明の目印となる端的な言葉（キーワード）を示す。 | 22 |
| 2017年05月 | 見 | ● 文書の注目してもらいたい場所を指し示す。 | 23 |
| 2017年12月 | 専 | ● 必要に応じて経験談を織り交ぜる。 ● 経験則はなるべく統計をとり、数値化しておく。 | 25 |
| 2018年07月 | 見 | ● 項目ごとに見出しをつける。 | 26 |
| 2020年07月 | 手 | ● 重複する内容はなるべく1つにまとめる。 | 29 |

※時期は、該当する論文を発表した年月にそろえた。

区分

| | |
|---|------------------------|
| 表 | ： 表現・日本語に関する工夫 |
| 手 | ： 手短にまとめるための工夫 |
| 見 | ： 見やすくするため・読んでもらうための工夫 |
| 専 | ： 専門的な内容に関する工夫 |